



山陽スピリット ニュース No32

2023(令和5)年9月1日

発行：学校法人 山陽学園 広報・山陽スピリット推進室

上代淑人先生の思い

元山陽学園法人事務局次長
岡崎 眞

私が上代淑人先生を意識したのは1990年代前半、当時の川上亀義理事長と会談中に川上理事長が、「上代淑人先生が、もうすぐ日本に帰ってくるので学園長になってもらおうと考えている。今、手紙を書いているところだ。」と話されたのが、最初だと記憶しています。その後、淑人先生は、時々山陽を訪ねてこられて校長や学長と話をされたと思いますが、一般の教職員や生徒と交流を深められたのは1996年頃です。当時、私は中高図書館の係をしていました。そこへ訪ねてこられた淑人先生と度々話をした時に、生徒や教職員に対して「山陽の心を伝える講演をしてください。」と依頼したのをよく覚えています。その後、亡くなられるまでの15年間の出来事や思い出を書かせていただきたいと思います。ただし、記憶を頼りに書いていますので私の記憶違いで正確性に欠ける箇所があるかもしれません。ご容赦ください。

淑人先生と淑先生

淑人先生は、雑談で淑先生と関連付けて自分の生い立ちを話されていました。淑人先生は、1950年に東大の医学部に入学して岡山を離れましたが、それまでは門田屋敷の上代淑先生の家と一緒に暮らしていたそうです。岡山空襲の時は、お兄さんの知夫さんが淑先生の所にいたので淑人先生は、校舎が焼け落ちる様子を見ることは無かったそうですが、その時の上代淑先生の様子などは、お兄さんからよく聞いていたそうです。戦後、淑人先生は旧制の第六高



2002年2月14日 高校一年生対象講演会「山陽学園の精神」でマイクの様子を確かめる上代淑人先生

等学校に通いながら山陽の復興の手助けを卒業生の皆さんと一緒にされていました。また、毎朝、旧上代邸から淑先生の手を引きながら山陽に登校し、白内障で視力が不自由であった淑先生のために手紙の代読もしていたそうです。

その後、岡山を離れて東京大学で研究者の道を進みます。淑先生の訃報を受けたのは、アメリカに留学中だったので帰国することが出来ず、電報で悲しみの心を伝えるだけになったことを残念がっていました。帰国後、東京大学教授、スタンフォード大学客員教授、東京工業大学客員教授を務められました。

1996年11月、淑人先生は、中高の図書館で多くの図書委員を前に淑先生の思い出を語りました。その中である生徒が「淑先生の人柄について教えてください。」と質問しました。淑人先生は、「一言で言うと非常に信仰熱心な人でした。」と答えられました。もちろんその後で「道で会う人、一人ひとりにおはようございます。と挨拶するんです。最初は皆

さん怪訝そうな顔をしますが、毎朝続けるとみんなが、挨拶を返してくれるようになりました。」と上代淑先生らしいエピソードを話してくれました。

私は、当然、・・・私生活も愛と奉仕の実践者で常に山陽や生徒の事を考えていた人です・・・という答えが返ってくると思っていました。しかしながら第一声が「信仰熱心な人」という返答には正直、驚きました。その後、私は山陽の100年史や110年史、130年史の編纂に携わることになり、上代淑先生の心内を私なりに推測するようになりました。上代淑先生は建学の精神を実現すべく奮闘努力しますが、度重なる財政難、家父長制が色濃く残る社会の中での良妻賢母を求める声、日清、日露、第1次、第2次世界大戦に突き進む軍国主義政策の中でキリスト教に基づく「愛と奉仕」の心を十分に実践できないもどかしさを感じられていたと思います。確かに山陽の教育制度、体制は妥協の連続でした。男女は車の両輪、キリスト教を道德の基とし、英語で高等普通教育を施し、知徳兼備の女子を養成という高い理想は、少しずつ影をひそめて裁縫や編物、礼法、琴、茶の湯、生花を学ぶ家族主義的良妻賢母教育に大きく方向修正し、キリスト教の宗教教育を行わないという方針を掲げて国の高等女学校の認可を受けることになりました。その成果が出て山陽の生徒数は増加し、財政難も克服しながら県内の名門女子校という名誉を獲得できたと思います。「山陽は特別な学校です。」と上代皓三先生が言われていました。この言葉の意味を上代淑先生に聞くと「山陽は上代淑先生の高い教育理念を支持する地域の名士の方々に支持されている特別な学校ということです。」と答えられました。たしかに戦前の上代淑先生の学校経営は順調に成果を上げていましたが、淑先生の「信仰に熱心なキリスト者」としての心を満たすことは十分に出来ていなかったと思います。そのため淑先生は、山陽の学校経営以外に旭東日曜学校、操山寮、石井十次の孤児院などの運営に協力を惜しかなかったと思います。特に旭東日曜学校には、長年にわたってかわり幼児から六高生（上代皓三先生を含む）まで多くの優秀な人材を育てられたと思います。淑先生と10年以上寝起きをともにして淑先生

の心の内を理解された淑人先生だからこそ第一声に「信仰熱心な人」と紹介できたものと思います。上代淑先生は100%の力を山陽に注がられました。また、同時に100%の力を旭東日曜学校などの地域の教育にも力を注がられたと感じています。

ノーベル賞級の研究者

2008年頃、当時の渡邊専務理事の所に共同通信社から「上代淑人先生のお弟子さんが今回のノーベル賞候補にノミネートされているので淑人先生からコメントをもらいたい」という趣旨の電話があり、皆さん大変驚きました。山陽に来てからの淑人先生は、自分の研究の事を、大きく語ることはありませんでしたが、親しくなった人には、「一人ひとりを大切に」という山陽の精神と自分が取り組んでいる命の設計図といわれるヒトゲノムの研究は、「一人ひとりに最適な薬や治療法を選べるオーダーメイド医療」という観点で繋がっていると嬉しそうに説明されていました。

このノーベル賞事件を受けてかどうかは、分かりませんが、当時の梶谷陽一郎校長が、高校の入学式の式辞で次のように上代淑人先生の事を紹介していました。

1990年頃のテレビで上代淑人先生が、卒業生の木原光知子さんと対談しました。淑人先生曰く「癌というものは手強いものです。手術だけではなかなか完治できません。しかし、基礎医学で細胞や遺伝子の研究を続けていけば必ず癌を克服できる日がくると思います。そういう思いで頑張っています。これからは、基礎医学が人類を幸せにする時代です。」

事実、淑人先生はその後も研究を続けられて、人の遺伝子情報・人ゲノムの解明に大きな役割を果たされて、お弟子さんのノーベル賞候補者ノミネートにつながったと思います。残念ながらお弟子さんの受賞とはならなかったものの淑人先生の功績はノーベル賞受賞に十分値するものであったと思います。

淑人先生の驚くべき記憶力

淑人先生が、2000年に岡山に帰ってこられた時、

上代皓三先生と奥さんの延世さんが住まれているマンションの同じ部屋が偶然にも空いていたので早速申し込んだと嬉しそうに話をされていました。私たちは、引越しのお手伝いを申し出ましたが、一人暮らしで荷物も少ないので業者の作業だけで十分だといわれました。しかし、何分、一人暮らしで食事には苦勞していたようで図書館に関係している先生方と昼食や夕食をよく一緒にとられていました。その時に、山陽の昔話やこれからの展望を話してくれました。私も何度か同席させてもらった時、車で送り迎えをしましたが、岡山市内の道をよく覚えていらっしやいました。どうして道に詳しいのかと聞いたところ、「新しくできた道は知らないが古い道と関連付けて市内の地理は大体分かっている。ニューヨークの市内も自分の運転でよく走ったものです。」と自信ありげに話されました。また、中高の教職員が企画した歓迎会や大小の勉強会のような催しがあった時、最初に全員が一言自己紹介をしましたが、20人ほどの自己紹介の内容（もちろん名前も）を全部覚えておられました。また、法人事務局に来られた時、受付にいる佐海さんを旧姓で栗原さんと親しく呼んでいました。後から佐海さんに聞くと、「大学の留学生センターにいた時、何度かお話をさせてもらったことがあります、何年も前の事です。それなのに下の名前まで覚えてくれていたのにはびっくりしました。」と教えてくれました。淑人先生の記憶力には驚くばかりです。

第1回山陽学園教職員研修会の一言

2007年8月24日、上代淑記念館のホールで中学、高校、大学、短大、幼稚園の教職員を対象に研修会が開催されました。講演は、上代淑人先生「山陽学園と上代淑」、濱田栄夫先生「上代淑と門田文化」、木原光知子先生「山陽学園と私」の3人によって、各自30分の持ち時間で行われました。講演の内容は記録がありますので興味がある方は、資料室までお問い合わせください。その後、休憩をはさんで3人の講師の先生方によるフリートークが行われました。その中で淑人先生が言われた次のような言葉が大変印象に残っています。

「山陽学園に関係している全員の皆さんが、このよ

うに一堂に会して講演を聞くということは、大変有意義なことです。これを機会に中学高校の先生方は、大学短大の先生方の顔と名前を憶えてください。また、大学短大の先生方も中高の先生方の顔と名前を憶えてください。そうすることが、山陽学園の発展の第1歩になると思います。」

淑人先生らしい一言です。この言葉に励まされて法人事務局では、この後も山陽学園教職員研修会を継続しています。今後、開催される研修会には是非ご参加をお願いします。

上代淑人学園長お別れの会

2011年10月9日、山陽学園の中高体育館でお別れの会が行われました。ステージの上に菊で飾られた祭壇が設けられて、その中央にこやかに微笑んでいる淑人先生の大きな写真がありました。式場一杯になるほどの参列者、淑人先生の業績や人柄を彷彿とさせる感動的なお別れの言葉などがありました。その中で、特に私の印象に残っているのは、妹の上代万里江さんのピアノと音楽科卒業生の矢木紀子さんのバイオリン演奏でした。東京の石神井の自宅でお父さんやお母さんと一緒に万里江さんの演奏を聴いていたと話してくれたのを思い出しました。この時に飾られていた淑人先生の写真は、資料室に保管してあります。

おわりに

上代淑人先生が亡くなられてからすでに12年経過しました。淑人先生と共有した時間を少しずつ思い出しながら書きました。私にとって大変楽しい作業でした。機会をくださった山陽スピリットニュースの先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。